

## ブリティッシュ・カウンシル夏期セミナー報告

佐賀医科大学一般教育 英語 池田 豊子

成田から12時間の直行便でヒースロー空港に着いたのは1993年7月3日の夕方であった。初めてのイギリスそして一人旅ということもあり様々な国の人々の流れの中で緊張と不安が交錯し、空港近くのホテルへと急いだ。2メートルは優にある黒人のポーター、フロントの早口の英語、コンシェルジュの懇篤さに戸惑いながら、第一夜はウィリアム・モリス風のインテリアに囲まれながら静かに流れていった。

翌朝のヒースロー空港第一ターミナルは、昨夜の国際線ロビーとは打って違って、まさに domestic という言葉が体現されているような等身大のイギリス人の生活が、あちこちに垣間みられ、心の底からほっとした。私に話しかけてきた初老の婦人たちは、スナップ写真を見せ合いながら、お互いの近況報告をしている姉妹であったし、うつろな瞳で娘に抱きかかえられるようにしている病んだ老紳士の姿もあった。ロンドン～アバディーンへの飛行は約1時間半、晴天に恵まれ、緑の陸地と真青な北海のコントラストがまぶしいくらい美しかった。機内食も満足できるもので“イギリスはおいしい”を実感している幸運を思った。

アバディーン空港で、一人の婦人にタクシー乗場を尋ね、これから3週間を過ごす大学の寮に着いてみると、さっきのあの婦人が同じ時に同じ場所に別のタクシーで着いているではないか！ 二人で挨拶をしながら、タクシー代が半分で済んだのにと笑いあった。この婦人ドリスは、オーストリア人で私と同じ年齢で家族構成、夫の性格にいたるまで酷似しており、このセミナーで一番親しい友人となった。

ここ、アバディーンは、日本人はあまり訪れないようだが、エディンバラ、グラスゴーに次ぐスコットランド第三の都市で、北海沿いに12世紀頃から発達した美しい街だ。スコットランドの花といわれるこの街は、人口20万、この都市の規模での犯罪率は、イギリスの中で最も低く、ロンドンの喧噪とは対照的な静けさが漂う。青空に尖塔が突きさすように並ぶ御影石でできた大聖堂や、カレッジの建物が印象的で、この街に The Granite City, The Silver City の名を与えている。太陽の光をあびて輝く石造りの建物の庭の至るところに植えられたバラが鮮やかであった。特に rose-line という道路沿いの植え込みは圧巻で、ドライバーの目を楽しませてくれる。是非見たいと思っていたスコットランドに群生するヒースは、8月の終わりに満開とのことで、一面の大地が紫色に染まる光景を想像してみるしかなかった。

アバディーン大学の歴史は古く、今年400周年をむかえた市の中心部にある Marischal College と2年後に500周年をむかえる旧市街にある King's College が紆余曲折を経て、1860年に University of Aberdeen として統合されたものである。特に医学部は1497年に設立され、英語圏の中で最も古い歴史をもつとのことである。17世紀の王冠をかたどったユニークなチャペルのある大学の建物を見物しながら、かつては赤いガウンをまとい大学の4年間、ラテン語、ギリシャ語を話していたという学生たちの姿を思いうかべている私たちのそばを、ジーンズにTシャツの若者たちが屈託なく通り過ぎていった。

翌日から、Literature and Language : contemporary issues (文学と言語：現代の諸問題) をテーマにセミナーが始まった。Lecture, Tutorial, Workshop, Evening Study Programme が組合わされ、カバーする分野も、novel/short story : drama : poetry : syntax : mass media と広く、参加者はすべての lecture, tutorialを受け、さらに optional tutorialを選ぶことになっていた。とにかく息つく暇もない感じであった。参加者は43名、内訳はオーストリア2、ブルガリア2、チェコ3、チリー1、デンマーク2、フィンランド1、フランス1、ドイツ1、ホンコン1、ハンガリー1、インドネシア2、イタリア10、日本1、ジョーダン1、マケドニア1、ノルウェー1、ポーランド1、シンガポール1、スロヴァク1、スペイン7、チュニジア1、ウクライナ1 (以上アルファベット順) で10名前後のチュートリアルに分かれる。日本人は私一人しかいない。誰も日本に行ったこともなければ一対一で日本人と話すのも初めてだという雰囲気、私は何となく日本人を代表しなくてはならないような気分になり、プレッシャーを感じた。アフリカの数名とインドネシアの2人を除く、アジア、南アメリカ人は、皆イギリス人と結婚していて圧倒的にヨーロッパ人ばかりであった。驚いたことに殆どの方が、アメリカに対し、私達もっているような親近感はなく示さず、英語といえばイギリス英語しか頭に浮かばない人達で、ヨーロッパが最高という感じなのだ。聞くところによると、自然科学の研究者達はとてもよく日本のことを知っているようだ。英文学を教えたり学んだりする教師が、日本、アメリカのことをあまり知らないのも、あたりまえなのかもしれないと何となく納得してしまった。ただ、テープレコーダーは、皆、ソニーが良いといていたが……。

先に述べた五分野の中で、私が特に関心を持って臨んだのは、novel/short story と poetry, drama であった。Teaching the Short Story は、私自身、毎年、クラスであつかっているものだが、読んだ作品はScottish writersのものが殆どでdramaticというよりも坦々とした日常生活を題材に人間の心の葛藤に重きをおいたものが多く、独特の味わいがあった。しかし方法論の面では余り目新しさはなく、各々が自分の解釈

を発表し、discussionを通して深めていくというものであった。今回の参加者はスペイン、イタリアのラテン系の人が多かったのだが、discussionの時の彼らの気迫というか aggressiveな態度には、大和撫子を自認する私は正直いって閉口した。彼女たちは tutorの問いかけに間髪を入れずに反応してしまうのだ。一度、愚問だけれどどうしてそうなのかと聞いてみたことがある。大家族に育ち、自己主張することの大切さを小さい頃から叩きこまれ、また十分な経験も積んできているとのことだった。Poetry は、browsing（草を喰む）をkey word に羊が草を喰むように、気のむくままにpageを開き、一つの詩を読む。またパラパラとpageをめくり他の詩に移っていくというのんびりしたもので、まるでスコットランドの羊達のイメージであった。これは、前もって読んでおかなくて良いので、私にとって唯一ほっとできるものだったが、他のメンバーは、tutorの指導性がないのが不満で読む詩を前もって指定してほしいという要望を出したりしていた。tutorは教える側も参加者も、同じ条件で先入観なしに、最初の印象を語り合いたいという意向で、平行線のままであった。スコットランド第一の詩人Douglass Dunnが、私達が彼の詩集 *North Light* を学んだ日、アバディーンで朗読の夕べを開いてくれた。白髪の大詩人の風格をそなえたDunnが、低い声で、霧にかすむスコットランドが自分の帰るべき場所と吟ずる時、夏の夜なのに、とても深い霧にかこまれているような気持になり、いささか重たかったが、詩のもつ力のようなものを実感した。また、drama courseはアイルランドの劇作家 Brian Friel の *Translation* を読み、その中にふんだんにでてくる Gaelicの発音に悪戦苦闘しながら、とてもローカルで素朴だといわれるアイルランドの村に思いを馳せた。

このような tutorialの他に、伝統的なキルト・スカートが揺れる Scottish Country Dancingの夕べ、Folk Song Festival、Drama Evening 等、様々な集いが催されたが最も心に残っているのは、参加22ヶ国のそれぞれの国の言葉でその国の代表的な詩を朗読する Poetry Evening であった。handout もなく、ただ、その言葉のもつ響きを頼りに聞くという試みであった。最初に望郷の詩とか、相聞歌とか、野バラによせる詩などの短いコメントがあり、それぞれの参加者の母国語が時に清らかな、時に深い川の流れのように聞く者の心をひたひたと洗う。言葉のもつ響きの美しさ、多様さを、こんなにも集中して耳を傾けた経験がなかった。とても静かだけれど素晴らしい感動が夜の静寂のなかにうねるようであった。三分の二ぐらい進んだ時、"Next, Japan"という司会の声がきこえた。日本を出発する時、何の準備もしていなかったもので、ヨーロッパでよく知られている松尾芭蕉の俳句しかないと思い、次のようなスピーチをつけて、二句紹介した。

Most poetry in English has rhymes and rhythms. I think the most traditional and simple style of poetry in Japan is haiku. In haiku, the number of syllables is strictly determined and should consist of three lines, each line should be 5, 7, 5 syllables in length respectively and also should contain some reference to the seasons. I would like now to take the opportunity to read two famous haiku poems which were written by Basho in the Edo period. The first poem is this:

古池や かわずとびこむ 水の音  
 (ゆっくり語を指で数えながら二回くりかえして読む)

If you think of the scene, an old pond, perhaps in an old temple somewhere, it's very, very quiet. Suddenly a frog jumps into the water and a small noise can be heard only because the surroundings are very quiet.

The second poem is this:

夏草や つわものどもが 夢の跡

The atmosphere in this Haiku is totally different from the first. It tells about how many violent and bloody battles were fought on this site there, and how many soldiers were killed in the old days, whereas, at the present time, in the 'here and now', dream-like grass-filled fields speak to you saying that everything that ever existed, either in the past or the present has no reality. Thank you.

はじめて肉声で日本語の俳句にふれた参加者から、異質の文化の一端にふれた喜びと共感が寄せられ、その夜のパーティーでは、質問攻めにあった。ずいぶんと曖昧な答しかできない場合もあり、日本の文化をきちんと説明できるようにならなければと強く感じた日でもあった。

チェコのパトリシアが、自分のクラスで、ラフカディオ・ハーンの *Mujina* を教えたことがあるとのことで、深夜まで耳なし芳一のことや日本の民話のことなど話した。

この日、スコットランドの伝統料理ハギス（羊の内臓をミンチにし、ハーブ・スパイス・オイルと混ぜて羊の腸につめこんだもの）とシングル・モルトのスコッチウイスキーを味わいながら、一歩、他の国の人々に近くなれたような不思議な感慨

に包まれ、夜は更けていった。イギリスのこと日本のことをつらつら考えていると、ほんの短い滞在でイギリスの魅力など語れないのだが、二つの言葉がくっきりと私の心に刻まれた。日本のこの俳句の心にも一脈通じているような *sensitivity to nature* (自然への豊かな感性) と *understatement* (控え目な表現) である。これが様々な違いを越えて多くの人々がイギリスに魅かれる一側面ではないだろうか。

Edinburghへの小旅行、ひっそりたたずむ古城の見学、High Tea, Hill-Walkingなどをへて、スコットランド英語に慣れるにつれて交流の輪も広がっていった。寮の同じフロアで耳にするイタリア語があまり気にならなくなった頃セミナーは Farewell Party を迎えた。最後のフォーマル・ディナーの後、色とりどりの民族衣装で語り歌い踊った。夜も更けた頃、幾度となく日本語で歌ってきたあの蛍の光のメロディーが流れた。その歌の故郷、スコットランドで、大合唱の渦の中で私も歌った。

Should auld acquaintance be forgot,  
And never brought to mind?  
Should auld acquaintance be forgot,  
Auld lang syne!  
For auld lang syne, my dear,  
For auld lang syne,  
We'll take a cup o' kindness yet,  
For auld lang syne.

この詩は、18世紀スコットランドの南西の Alloway の寒村に生まれ37才という若さで生涯を閉じた Robert Burns の手によるもので原題は Auld Lang Syne (Old Long Ago) である。やはり別れの時に、円陣になって手をつなぎ、中央に歩みより、またさがる動作をくりかえしながら歌う。普段、私達の歌うテンポより少し速めで、歌いすすむにつれて速度は一層速くなり終りへと向かっていく。世界各地から集いひと夏を共有したこの出会いがお互いの宝物になり続けることを祈って-----。

私の 'Seeing is Believing' Tour は、その後、London、Cambridge、Bradford、Haworth、York、Nottingham、Folkstone と続いたが、その顛末は別の機会にゆずりたい。